

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第36号 2000年7月1日

稲富一夢を弁護する

国立歴史民俗博物館教授

宇田川 武久

稲富一夢は火薬をもちいた銃砲などの武芸のひとつである。しかし、こんにち教科書はもちろん、一般向の歴史書でも話題になることは少なく、せいぜい対外危機に直面した幕府が高島秋帆の西洋流砲術を導入したことぐらいであろう。そのうえ、ほとんどの人は、これを砲術の濫觴とみなして、それ以前に砲術があったことには、思いもいたらないらしい。

砲術の濫觴は鉄砲の伝来とともにあった。この時期、国内は群雄が割拠して、戦乱の日々が続いていた。やがて外国渡来の鉄砲は注目され、戦いの主役になった。

鉄砲の普及につれて、砲術を家業とする砲術師が各地にあらわれた。すると多くの武士が砲術師について射法を習い、大名は戦備強化のために優秀な砲術師の獲得に血眼になった。そうした砲術師の代表として稲富一夢をあげなければならぬ。

一夢は慶長十六年二月に六十一才で駿府で病死したから逆算すると、天文二十一年、鉄砲が伝来して九年目の生まれになる。父直秀から鉄砲術の手ほどきを受けた一夢は、成長するにしたがつて腕をあげ、ついに秘伝をさずけられた。その後、系譜は丹後(京都府)の忌木を

離れて牢人になったと書いている。これは一夢が武芸者、つまり砲術師として独立したことを意味している。諸国を転々とした末、一夢は秀吉の世話で、細川家につかえ、同氏の家臣はもとより、他家の武士たちにも砲術を伝授した。弟子のなかには著名人が多く、やがて天下無類の名人と一夢は世人の評判をえた。

日本中が激震した関ヶ原の戦いとき、大坂の屋敷にいた細川忠興の夫人は、石田方に奇襲されて自殺した。ともにいた重臣はこれに殉じたが、一夢は出奔して、行方をくらました。むろん一夢の行動を細川家では不忠となじった。こんな中でも一夢が臆病者とか、卑怯者とかの烙印を捺されているのは、この事件に端を発している。

三年後、一夢は徳川家康の四男、尾張清洲城主の松平忠吉に二〇〇〇石の高禄で召し抱えられた。所領を給与する際、大名は知行宛行状という、いわば約束手形を発行した。たしかに宛名は稲富一夢とあり、主人のサインもある。ところが、宛名に殿はないし、松平忠吉のサインだけで姓名も肩書もない。なんとも不思議な文書である。通常の家臣には姓名とサインを書き殿もきちんと書いてこんな無愛想な知行宛行状はださない。



松平忠吉知行宛行状 国立歴史民俗博物館蔵

それではこれは偽文書かというところ、そんなことはない。松平忠吉のだした文書類を調べると、尾張の鋳物師の水野氏にあってたものがある。これは別に不思議ではなく、要するに一夢は職人とおなじ身分であった。一夢は砲術師である。砲術師は武芸者である。武芸者は職人とおなじく職能を生業とする。だから大名は武芸者を職人とおなじとみた。職人は技術を糧に、武芸者は武芸を糧に大名につかえた。だから御恩と奉公で結ばれた通常の家臣とは、あきらかに個別の存在であった。一夢は砲術師として細川家につかえていた。ふつうの家臣ではなかったのである。一夢が出奔いやその場を待避したのは臆病や卑怯ではなく、武芸者としての行動であって、決して不当ではない。通説の一夢に対する非難は、的外れといわざるをえないのである。

企画展

●近世土佐の炮術史●

—徳弘孝蔵とその時代—によせて

野本 亮



伝種子島初伝銃 個人蔵（種子島開発総合センター保管）



仏狼機砲（複製） 津久見市蔵



国重文：徳川家康愛用の火縄銃（銘 慶長18年7月吉日 日本清堯（花押） 久能山東照宮博物館蔵

戦国時代の真つ只中、その後の日本の歴史に重大な影響を及ぼすこととなる「鉄炮」が伝来しました。

当初は、室町將軍家や各地の有力大名の間で新奇な贈答品として扱われた鉄炮も、次第に新兵器としての価値が認められると、薩摩の島津氏、豊後の大友氏など、主に西日本の戦国大名がいち早く実戦に投入したと考えられています。

十数年後、「大鉄炮」と称される大口径の銃が、さらに七、八年後には城郭・軍船の破壊を目的とした大型砲（大筒・石火矢）が出現します。

こうした新兵器の国産化・量産化を可能にしたのは、国友や堺、さらには有馬や江戸といった全国各地の鍛冶や鋳物師を中心とする手工業の発達があったことは言うまでもありません。

さて、近世初頭期になり、戦術として銃炮が大量に使用されるようになるのと、射撃術に優れた者が一流を創始するようになります。いわゆる砲術師と称される人々です。

この砲術のプロフェッショナルを諸国の大名は争って召し抱えるわけですが、平和な時代の到来とともに、彼らや砲術そのものが変質を余儀なくされます。

本展では、土佐における銃炮導入の時期や、土佐に來国した砲術師と展開

した流派、その流派のもとに依じて稽古筒等を鍛えた鉄炮鍛冶を可能な範囲で紹介すると同時に、近世前期と後期の砲術をとりまく時代的背景にも迫っていきたいと思います。

第一部では、土佐一条氏、長宗我部氏時代の鉄炮・石火矢の状況を推定したうえで、山内氏入国後の土佐藩の鉄炮支配、お抱え砲術家と流派の隆盛、次第に変質してゆく砲術の様子を主に文献によって描いてゆきます。

ここでは、特に徳川家康愛用の火縄銃に注目してください。重要文化財の本品は、近世初頭期の形状を今に伝える極めて貴重な資料であり、減多に目にすることはできない逸品です。

逸品といえば、第二部「鉄炮・石火矢の基礎知識」コーナーにおいて展示される、関流九百目玉筒（谷神）も注目です。その圧倒的な迫力の前には、誰もが言葉を無くすことでしょう。重量と激しい衝撃に耐えながら、ひたすら鍛練に励んだ武士の心意気と、頑固なまでに注文主の要求に応え、精緻極める技を發揮した国友系鍛冶のプライドを御堪能ください。

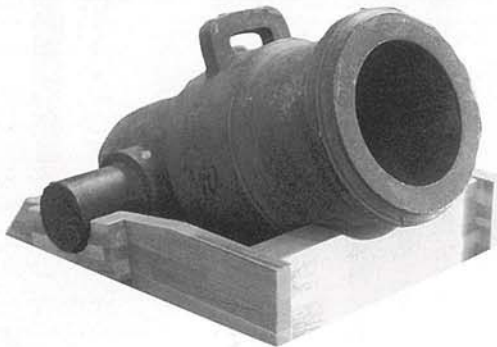
また、商品価値を高めるため、華やかな象嵌を施した堺筒と、実用を全面に出した、武骨な零囲気の漂う土佐筒を比較して鑑賞するのも面白いと思います。



高島四郎太夫砲術稽古業見分之図 板橋区立郷土資料館蔵



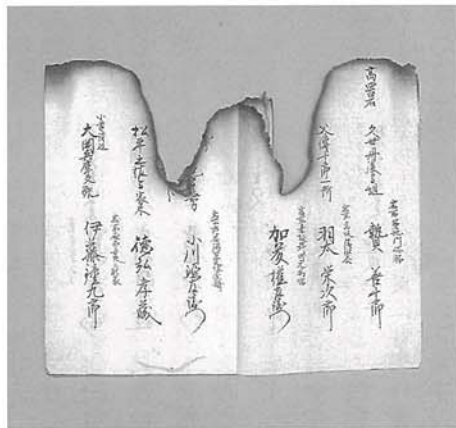
徳弘孝蔵肖像画 個人蔵



モルチール砲 (青銅製) 板橋区立郷土資料館蔵



扇 下曾根金三郎筆 高知市民図書館蔵



分限帳 高知市民図書館蔵 ※下曾根塾門人録を孝蔵が筆写したもので、孝蔵自身の名は八番目にある。



ところで、平和な時代の到来とともに実践的な要素が後退し、変質していった砲術ですが、異国船が頻繁に日本沿岸に姿を見せる幕末頃から再び復興の兆しが見えてきます。

第三部では、ついに本展の主役、徳弘孝蔵が登場します。

孝蔵の先祖は、戦国時代の有力国人山田氏に仕えていましたが、長宗我部氏との戦いに破れて浪人の身となり、六代目までは不遇の時代が続きました。しかし、土佐藩第三代藩主山内忠

ところで、平和な時代の到来とともに実践的な要素が後退し、変質していった砲術ですが、異国船が頻繁に日本沿岸に姿を見せる幕末頃から再び復興の兆しが見えてきます。

なお、展示だけでは物足りないという方のために、戦乱の時代における砲術師の実態を国立歴史民俗博物館の宇田川武久先生に、幕末土佐藩の洋式軍事改革について、梶輝行先生にそれぞれ御講演いただきます。御期待下さい。

このコーナーでは、こうした徳弘家の系譜を概観しながら、土佐藩における和流砲術から洋式砲術への転換、洋式軍事改革の実態を徳弘家資料を中心に展示します。孝蔵が下曾根塾(膺懲館)に学んだ時の資料、とりわけ化学、数学、語学の水準の高さを示す資料などからは、当時の砲術家の知的レベルを推察することができますし、家老から足軽までが名を連ねる「徳弘家門人帳」からは、土佐の洋式砲術家として彼が果たした役割の大きさをしみじみと感じ取ることができます。これまでに南画家董斎としてのイメージが強かった分、本展が彼の再評価につながれば幸いです。また、ここでは西洋砲術導入の祖である、高島秋帆関係資料もまとめて展示しますので、じっくりと御鑑覧下さい。

豊の時代に七代目佐右衛門が「御持筒役に抜擢され、以降は代々白札格をもって同役を勤め、島田流を家芸として大いに励んだといえます。孝蔵は同家十二代目の当主でした。

重要文化財 野市町 兎田八幡宮 絵画銅剣 発見秘話

「精霊たちとの出会い」

岡本 桂典

兎田八幡宮に剣が所蔵されていることを耳にしたのは、平成五年の暑い夏の盛り、七月二十三日のことであった。その日は、野市町教育委員会と野市史談会からの依頼で香宗我部親氏の宝篋印塔の実測調査と銘文の判読をするため、筒井作郎副館長（当時）と戸田陽子女史を伴って野市町の御墓所に赴いた。御墓所では、史談会のメンバーの方々が、墓所の雑木の清掃を行っておられた。あの日なぜか、照りつける太陽が非常に眩しかったことを鮮明に覚えている。その時に、史談会の久家治水氏から、兎田八幡宮に剣が所蔵されており、弧文のような紋様があることを聞かされた。そして、久家氏は熱心にスケッチを示しながら銅剣のことを語ってくれた。この時、この銅剣が絵画銅剣であることは、想像もしていなかった。弥生時代の青銅器であろうか、それとも時代的に下がる剣であろうかと色々と想像もしてみた。その日の蒸し暑い夕方、実物を拝見させて頂くことをお願いし、その場を辞した。

銅剣を拝見させて頂いたのは、それから一ヶ月後の八月二十二日のことであつた。兎田八幡宮の鳥居を抜け、ゆつくりと階段を登るとそこに八幡宮が鎮座していた。なお、この調査は、野市町教育委員会から依頼をうけて行った調査であつた。歴史民俗資料館からは、当時の高知県立歴史民俗資料館運営審議会委員の岡本健児氏、筒井作郎副館長と小生の三名が調査に赴いた。野市町からは、当時の弘田忠士教育長、社会教育課小松大洋氏、そして野市町文化財審議会会長久家治水氏等、官司の近森友字郎氏、総代の小松亮氏が立ち会つた。

静寂に包まれた社殿の中で、袋から取り出された青銅器を拝見することになった。その青銅器は、やや黒色がかった弥生時代の銅剣であつた。やや薄暗い社殿の奥で、恐る恐る拝見すると、なにか半円状にみえる紋様が銅剣にみえた。銅剣は細形銅剣のように思えた。しばらく見ていたが、薄暗くて紋様は、はつきりしなかつたが、重弧文のようにもみえた。写真撮影の許可を頂き、明るいとこへ銅剣を移動し、撮影位置を決めるため、観察する前にレンズを覗き込んで驚いた。重弧文と思つて

みていた紋様は、動物のようにみえた。一瞬、「ア」と思った。それも、両面にある。今までこんな銅剣見たこともない。すぐに、このことを全員に伝えた。「エ？」と、だれかが応えた。とんでもないモノが出てきてしまった。全員が、銅剣の絵画に釘付けになった。片面に四足の動物が二匹、トリが一匹、そしてトリの下半部、もう片面には、トリとカエルとカマキリが鑄込まれている。急遽、写真撮影を済ませ、全国に類例のない銅剣であることを伝えた。そして、頭の中を過ぎつたのは、マスコミ対応のことであつた。このことは、絶対に口外しないことを全員で確認した。この件については、神社の宝物であり、今後の対応について検討して頂くようお願いして八幡宮をあとにした。そして、二ヶ月後の平成十一年十一月三十日の野市町教育委員会での新聞発表まで全員が貝のごとく口をつむんだ。実は、館の職員にも当日までひた隠しに隠していた。このことが、どこからか漏れ、筆者は大阪の某新聞記者に一週間前から夜打ちをかけられ、閉口した。

本年、四月二十一日の金曜日、高知県教育委員会は、兎田八幡宮の銅剣が国の重要文化財に指定されたことを発表した。これは、高知県の考古資料では第1号である。この銅剣には、片面に「シカ・シカ・鳥（サギ）・鳥（サギ下半身）」、もう片面に「鳥（サギ）・カエル・カマキリ」の画像が描かれており、弥生時代の青銅器生産や画像の意味を考える上で不可欠で、極めて学術的な価値が高い資料である。

かつて、インドに調査にいった人類学者の次のような話が伝わっている。それは、ある晩、人類学者はジャングルの木立の中で恍惚の表情をして踊る奇妙な聖者の光景に出会う。聖者は、木を抱きしめ、木の葉が騒ぐと声をたてて笑う。これをじっと見つめていた人類学者は、ついに口を開き聖者に尋ねた。「どうしてこのような場所で一人で踊っているのか」と、聖者はきょとんとした表情をしながら返事した。「なぜ、わし一人しかいないと思うのかね」と。聖者には自分を取り巻く森の精霊たちがみえるのであるが、人類学者には、木と木の葉しかみえないのである。これは、二人のよつてたつ世界観が異なっているからである。絵画銅剣を再度みてふとこのような話を思い出した。

西暦二千年を生きる我々と約二千年前を生きた人々とは、霊的世界観が大きく異なっていたのである。弥生人は、自然の中に生きるものに精霊をみたのである。

ちやぶ台

曾我 満子

当館では昨年秋に企画展「道具が語る食の文化」を開催した。企画展を開催すると、いろいろな情報や時には資料も収集する機会に恵まれることがある。

ちやぶ台は、これまで館の収集資料の中には無かったが、展示に欠かせない資料なので当館の資料調査員の先生方に情報収集の協力をお願いしていた。集まった情報から幸いにも二点のちやぶ台を寄贈いただくことができた。

ちやぶ台は漢字で記すと卓袱台と書く。卓袱とは直接には卓の袱ふく(覆う布)で、テーブルクロスのことを指すが、転じて中国形式の食事の際に用いる食事台を意味する。数名が一つの卓袱台を囲んで料理を取り分けながら食事をする。

寄贈いただいた資料は、資料カードには「ちやぶ台」と記したが、「飯台はんたい」と呼んだところが多いようである。大小二つの丸いちやぶ台が収集された。大きいものは径九一cm、高さ二六・八cm。小さいものは径六〇・三cm、高さ

二四・二cmである。小さいちやぶ台の方は見た感じも大変小さく、まるでまごとの道具のようである。使った方のお話によると新婚時、あるいは子どもが一人の時に使ったとのことだった。小さいちやぶ台を囲んで向き合う新婚夫婦の仲睦まじい姿が目にくらんでくるようである。



ちやぶ台 (脚が折り畳めるようになっている)
資料番号 99-1-00012

食事をする時、古くは各々が盆のよ
うな折敷おしきという膳ぜんに食器を載せた。や

がて脚がついた高さのある膳や蓋付きの箱膳はこぜんを使用し、大正時代頃からちやぶ台が使われるようになった。それは都市部から普及し、脚が折り畳めるものが重宝され、狭い都会の住宅で大いに役立つ。高知の農村部では昭和三〇年代でも箱膳はこぜんを使っていたところがあつたようである。そして箱膳はこぜんの使い方かたのわかる写真を企画展の準備中に探していたら、何と昭和六一年でも奥深い山村では老人が日常の食事しょくじに使用していた。

箱膳はこぜんを使っていた時代、茶の間では上座かみざ、下座しもざが決まっていた、家族はその所定の場所で各人の箱膳はこぜんの前に食事をしてきた。ところが、ちやぶ台を使用するようになると、その形は丸いものもあつたりで、座る場所は必ずしも固定されなくなった。戦後の民主主義の風潮も手伝って平等な家族の姿が見えてくるようである。現代では食事台といえはテーブルと椅子が主流となり、完全に西洋流である。そして食事の内容もその傾向にある。

ここで一つ問題にしたいことがある。食事の台と食事する人の口までの距離のことである。折敷おしきを使っていた時代、その距離は床面から口までの距離、箱膳はこぜんの時代になると、座って膝から口までの距離、ちやぶ台を使用するようになると台面は少し高くなった

が、いずれも長距離である。そこで日本人は茶碗を胸の位置まで持ち上げてそこから箸を使うという食事の作法をつくりあげた。しかし、テーブルの時代になって、さらに台面は高くなり、茶碗を持たなくても食べ物たべものが途中でこぼれる心配はなくなった。俗に「犬食いぬい」といわれる少し背を屈かがめて口を近づける食べ方をする人が増えたのも昨今の状況である。行儀作法も道具、そして時とともに変化するものであろうか。

道具が変化しても、食事をする風景は太古の時代から基本のスタイルは不変であつた。つまり、食事は一人で行うものではなく、家族が集まって面と向き合つて行つのが当たり前だつた。現代の食事の風景はいかかなものだろうか。たとえ家族全員が揃わなくても欠けた一員を思いやりながら食事しょくじをしているだろうか。あらゆる場面で人と人の関係が希薄になりつつある時代にあつて、地域や家族の関係も濃密さを失ってきている。食事を例にとっても家族が一堂に集まって食事をする機会きかいは少なくなつてきているのではなかいか。かつての食事の風景を端的に語る資料としてちやぶ台がある。

土佐の民具 2

漁村のエビス神像

坂本 正夫

フナダマ(船霊)さまと並んで漁師の厚い信仰を集めているのがエビス神(恵比寿あるいは恵美寿・蛭子・夷・戎などと表記)であるが、そのご神体は木像、石像、画像、自然石、その他いろいろなものがある。

エビス神は、その初めは海の彼方の異郷から迎えられた神霊であり、庶民の生業を守護し漁業や農業などの生産活動や商業活動に福利をもたらすといわれている。

漁村では豊漁をもたらす神だと考えられているが、これには浦(漁村)の祭祀対象になっているもの、ブリ大敷網やイワシ網漁、カツオ、マグロ漁などの漁撈組織で祭るもの、それに個々



土佐清水市大浜

ある。漁村ではハエ(鰯)、海ブチ、磯鼻、波戸の鼻、港の上、港、岬、アジロ山、浜、浜屋敷、浦屋敷などに祭られており、エビス神が漁を招く神であることがよく分かる。盗んできたエビス像を祭ると漁運に恵まれるという話をよく聞く

の漁師が自家の神棚で祭るもの、三つの形態が見られる。また町の商人、職人の間では商いの神、市を繁栄させる神として信仰されているが、農村では作神、農神として、あるいは家の守護神として信仰されている。

昭和六(一九三一)年に高知県神職会が刊行した『高知県神社誌』(竹崎五郎著)によると、当時県下にあったエビス神社は一一九社であるが、いずれも無格社(小祠)である。

このうち九五社が漁村で祭られており、その他はほとんどが福神、市神、商業神として町場(高知市・土佐山田町・須崎市など)で祭られており、農神と考えられるものはわずかに五社で



原資料 南国市札場(複製 当館蔵)

が、安芸市東浜のエビス像が高岡郡の某浦の漁師に盗まれたことがあり、それを取り返しに行った漁師との間でトラブルを起こしたことが語り伝えられている。その後、このエビス像が再び別の浦へ盗まれたが、今度は「安芸の浦の見える所じゃあないと、おるのは嫌じゃあ」というのでお迎えに行ったという話もある。昭和二十年代のことだが、県東部のある漁業組合事務所のエビス像を、ある漁師が盗み出してこっそり自宅で祭っていたところ、急にその男が豊漁になり盗みがばれたという話もある。

大月町柏島のエビス神は木像・石像の二体であったが、木造のエビス像は不漁の続く漁師に盗まれて、誰にでも気軽について行くので、「あのエビスさんは浮気女みたような神さまじゃ



南国市札場 撮影 田辺寿男氏

あ。けんど漁をさいてくれるありがたい神さまじゃあ」といって厚い信仰を集めていた。他所のエビス像を盗んできて祭り、豊漁を期待するのは土佐の漁村だけでなく、広く各地に見られる民俗である。これは負の状態(不漁)をくつがえし、一気に(漁のある)正常な状態に戻すには、普段はしてはいけない行為によつてのみ急激な状況の変化が可能である、という漁民社会特有の心意によるものだといわれている(『日本民俗大辞典』が、同様の民俗としては船霊盗みがある。またカツオ漁の不漁が続くとき、陽気な女房たちが船に乗り込んで船霊を祭り「漁をさせてくれたら全部見せます」と言いながら、ちよつと裾をめくって騒ぐマンナオシもエビス盗みに相通ずる民俗である。

●二千年前の絵画銅剣が
重文指定

野市町兎田八幡宮伝来の絵画銅剣が、高知県の考古資料として初めて国の重要文化財に指定されました。

絵画銅剣にはシカ、トリ(サギ?)、カエル、カマキリの四種の動物が描かれており、弥生時代の青銅器生産や祭祀を考える上でたいへん貴重な資料です。

この銅剣は、平成五年から当館に寄託されたもので、重文指定に向けた調査のため今年一月から文化庁に貸し出していました。銅剣が里帰りした五月十二日は、当館が報道関係者によって時ならぬ熱気に包まれました。



歴史スポット②
エビス 恵美須 (民俗展示室)

エビスには、当館がオープンしたばかりの頃、よく賽銭があがっていました。「博物館に出張しているエビスさんに、ひとつ福をもらおうやいか」ということでしょうか。しかし、このエビス、実は複製なんです。信仰の対象は易々と頂戴してくるわけにはいきません。複製品は中土佐町久礼の本物のエビスにそっくりで、複製技術の粋を見せています。けれど潮風の中に立つ本物のエビスの方が、何故か厳めしく男前に見えるのです。

詳しくは館長の「土佐の民具2」(本紙6頁)をお読みください。(中村)

古き良き時代に、
タイムスリップ

史跡めぐり「町並みウォッチング」に、溝淵博彦先生(高知県文化財保護審議会委員)を講師にお迎えし、徳島県牟岐町出羽島を訪れました。

車内では溝淵先生より、事前学習として用意されていたレジメに基づき出羽島の概要が説明されました。また、ビデオを交え県内の町並み保存の実態や今後の状況について学習を深めることができました。

そして、いよいよ牟岐港より出羽島へ。台風の余波を心配していましたが、波しぶきと戯れながら十五分間の快適なクルージング(?)。出羽島では長

田富美子さん(島在住の民生委員さん)が出迎えてくれました。そして、長田さんの自宅でミセ(折りたたみ式戸戸、開放時には縁側になる。)を前に日常生活の活用方法や構造を話して下さいました。

さて、この出羽島には自動車なるものがあります。自動車は現代社会を象徴する代名詞、その自動車が一台中もありません。今日、自動車がない社会を想像できますか。静かな町並み・信号機のない交差点? ちょっと不便かななど、様々な視点で考えさせられます。

しかし、出羽島にはそんな現実じみた考えを超越し、受け入れてくれる不思議な町並みがありました。



ミセに座る長田富美子さん

参加者の声を紹介いたします。今回初めて参加でしたが、自然環境問題等、大切さを改めて感じさせられました。(五十五才・女性)

出羽島の町並みを見て昔の人々の賢さや苦労がよく分かりました。こういう町並みは保存しなければと思います。(六十九才・女性)

何の注意もせず平素通っている道筋に先人の知恵の結晶である「文化遺産」として接する機会を得、有難く思います。(六十七才・男性)

詳しい資料を出して頂き、見学する上で大いに参考になりました。狭い島ですが、十分見るためにはもつと多くの時間が必要のように感じました。(六十九才・男性)

紙面の都合、参加者全員のご感想が載せられなかったことが残念です。



町並みの特徴を解説する溝淵博彦先生(左端)

ミセに座り、お隣さんとの会話が弾む夕涼み忘れてしまった古き良き時代ではないでしょうか。(泉誠司)

企画展「近世 土佐の炮術史」
7月20日(木・祝)～9月3日(日)



天文12(1543)年、種子島に伝来した鉄炮は、時間をかけて西から東に普及していきました。今回の企画展では、土佐における鉄炮の歴史を体系的に取り上げてみたいと思います。土佐藩の洋式砲術については、徳弘孝蔵関係資料を用いて多角的に考察します。また国立歴史民俗博物館のコレクションも紹介します。

講演会

- ◎ 7月22日(土)14:00～16:00
「戦乱の時代における砲術師の実態」
宇田川 武久氏(国立歴史民俗博物館教授)
- ◎ 8月19日(土)14:00～16:00
「幕末土佐藩の洋式軍事改革」
梶 輝行氏(神奈川県立高浜高等学校教諭)

講座

- ◎ 8月5日(土)14:00～16:00
「土佐の砲術史」(展示解説)
野本 亮 (当館主任学芸員)

子ども歴史教室

- ★ 7月29日(土)10:00～12:00
鉄炮足軽になってみよう
- ★ 8月12日(土)10:00～12:00
水てっぽうをつくろう
- ※ 講演会と講座は葉書で、子ども歴史教室は電話で事前にお申し込み下さい。(先着順)

次回企画展

**おばあちゃんの見た
山村の80年 10.13(金)～2001.2.18日**

歴史館に多くの資料を寄贈していただいた物部村岡ノ内の宗石家の資料を中心に、おばあちゃん春子さんの視点から、山村の生活とその変化を振り返ります。



新シリーズ

民俗講座

14:00～16:00

- ① 10月21日(土)
「土佐民俗学入門」
坂本正夫(当館館長)
- ② 1月13日(土)
「民具と方言」
橋尾直和氏(高知県立高知女子大学)
- ③ 1月27日(土)
「岡ノ内の民具」
梅野光興(当館主任学芸員)
朝倉千代氏(当館資料調査員)

(歴史館日録)

| 月日 | 出来事 |
|-------|-----------------------------|
| 3・17 | 企画展 「記された歴史のメッセージ」開幕 |
| 25 | 講座「墓標と文字」 |
| 4・15 | 講演会「土佐の古仏」 |
| 5・6 | 子ども歴史教室 「民話の家④ 節供の話」 |
| 13 | 史跡めぐり 「町並みウォッチング⑤徳島県出羽島」 |
| 21 | 企画展閉幕 |
| 6・3 | 子ども歴史教室 「縄文土器の拓本をとろう」 |
| 12～19 | 収蔵庫燻蒸にとまなう休館 |

《ひとこと》

4月より歴史民俗資料館に勤務となり改めて郷土に根付いた悠久の歴史や民俗を体感することができました。みなさんも一緒に新しい発見をしてみませんか。(泉誠司)

屋外展示の旧味元家住宅が国の登録文化財に指定されました。(中村)

歴史のホームページ、装いも新たに、情報満載しました。(曾我)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第36号

平成十二年七月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11

TEL 0888(862) 22111

FAX 0888(862) 21110

開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)に
あたる場合は翌日(12月28日)と
1月4日、臨時休館あり。

入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上)450円
団体(20人以上)360円
高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、高知市及び高知市長寿手帳所持者は無料

印刷・共和印刷株式会社